

京都帝国大学学生時代の國芳

石橋 哲成 (研究所特別研究員)

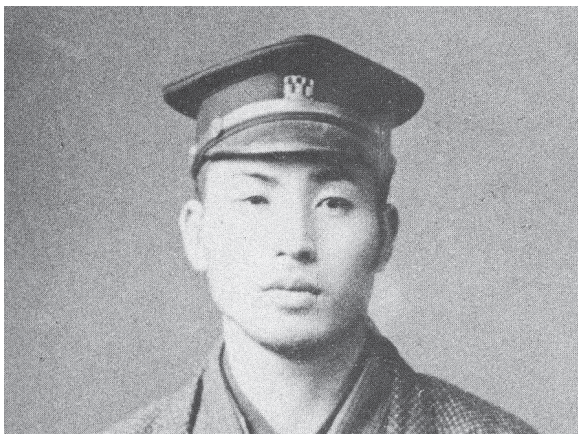
はじめに

香川県師範学校の教諭を2ヵ年半で辞めた國芳(當時は鱒坂の姓であった)は、1915(大正4)年9月、再び学生となって京都帝国大学(写真①)文科大学哲学科に入学した。当時の日本の帝国大学は、9月入学であり、また、文学部のことも、文科大学と呼ばれていた。國芳、当年にとって28歳であった。(写真②)

ここでは、1. 京都帝大哲学科学生としての國芳、2. 京都洛陽教会における國芳、3. 國芳の芸術心を育てた京都「南座」、4. 真如堂の末寺、理正院での下宿生活、そして最後に、5. 京都帝大における卒業論文、といった5点に絞って見てみることにしたい。



(写真①) 現在の京都大学正門と時計台 (撮影: 石橋)



(写真②) 京都帝国大学学生時代の國芳

1. 京都帝大哲学科学生としての國芳

京都帝国大学は、東京に日本で最初の帝国大学が創立された20年後の1897(明治30)年に、2番目の帝国大学として創設された。東京帝国大学が国家の官吏養成に力を入れていたのに対し、京都帝国大学は自由な学問研究と、どこまでも学生の自主性を重んじた教育がなされたようである。國芳が入学した1915(大正4)年は、京都帝国大学創立20周年を2年後に控え、哲学科はまさに黄金時代を迎えようとしていた。

当時の京都帝国大学文科大学哲学科の教授たちには、哲学講座担当者として西田幾多郎教授(1870-1945)(当時45歳)、西洋哲学史講座担当として朝永三十郎教授(1871-1951)(当時44歳)、印度哲学史・宗教学講座担当として松本文三郎教授(1869-1944)(当時46歳)、倫理学講座担当者として藤井健治郎教授(1872-1931)(当時43歳)、美学・美学史講座担当者として深田康算教授(1878-1928)(当時37歳)、教育学・教授法講座担当者として小西重直教授(1875-1948)(当時40歳)等の先生方が居られた。30代後半から40代半ばの若々しい教授陣であった。

國芳は『自伝』に書いている。「全く、どこか、学問の王国の桃源に、ユートピアに飛び込むような気持ちで、若鷹のような鋭刺さで、あこがれの京大哲学科に入学した」と。國芳が籍を置いたのは、哲学科の中の教育学・教授法講座であった。

そして、國芳が3年次の1917(大正6)年12月、生涯にわたって深い関わりを持つことになる波多野精一教授(1877-1950)(当時40歳)が宗教学(キリスト教)講座担当者として、京都帝国大学へやってきた。ドイツ留学中に原始キリスト教研究に触れ、1908(明治41)年に『キリスト教の起源』を著していた波多野教授が、京都帝大の宗教学講座の担当者として着任したことにより、「初めて専任者によるキリスト教の授業が行われることになった」という。それまで宗教学講座には松本教授の仏教学関係の講座しかなかったのである。クリスチャンの立場から宗教学を研究していた國芳にとっては、幸運なことであった。

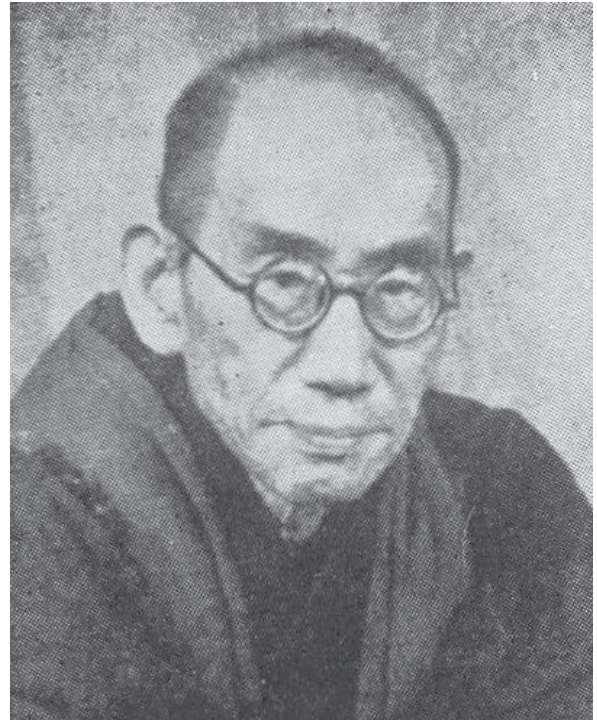
國芳の場合、教育の対象が人間である限り、「人間と

は何か」ということが一番の関心事であった。そこから教育の内容も見ていこうとしたのである。そこで國芳は、先哲がすでに示してくれているように、人間の心には知・情・意の3領域があり、それに相応して「知性」と「理性」と「感性」の3つの心意能力があること、さらにそれらの産物として、人間文化としての「哲学」、「道德」、「芸術」の世界があることから出発した。この点について國芳は、「知情意・・・この3つに対し、価値として真善美の三つがあります。文化として現れては、哲学の世界（広く学問全体を含ませて）、道德の世界、芸術の世界の三つが展開されます」と述べている。

では、國芳にとって「宗教」は、学問、道德、芸術とどのような関係にあると見たのであろうか。この点について國芳は、さらに次のように述べている。「而してわれわれの心意活動の全範囲は知情意の三方面に尽き、此等の範囲のいずれにも属しない価値は決してないにもかかわらず、宗教的価値の世界があるのは何のワケがあるかという、それは、学問でも、道德でも、芸術でも、一々突きつめて行けば、いずれも超越的な神秘境に触れ、それら一切の価値が宗教的形式を取り得るからです」と。

國芳は、教育の内容として「学問」、「道德」、「芸術」があるだけではなく、さらにその根底に「宗教」が欠くべからざるものとしてあることを確認したのであった。であるから、國芳は宗教を「精神生活の一局部の作用」ではなく、「あらゆるものに根差し、あらゆるものに達し、知的にも、感情的にも、執意的にも、人間全精神要素の全活動である」と考えたのであった。西田教授がその著、『善の研究』（1911年、弘道館）において「学問、道德の究極は、宗教に入らねばならぬ」と述べていることも、國芳の胸に強く響いたようである。

というわけで、國芳は教育の根本を深め、同時に教育の内容を確立するために、小西教授の「教育学」関係の授業に主軸を置きながらも、西田教授の「哲学」関係の授業、朝永教授の「西洋哲学史」関係の授業、藤井教授の「倫理学」関係の授業、深田教授の「美学」関係の授業、さらには、遅れて就任された波多野教授の「宗教学」関係の授業に積極的に出席したのであった。では國芳は、教育の根本を深めるために、上記の哲学科の先生方とどのような関わりを持ったのであろうか。後に國芳が『自伝』の中で述べていることを参照しながら、先生方との関わり、先生方の授業との関わりについて垣間見ることにしよう。



(写真③) 西田幾多郎博士 (1870-1945)

先ず、哲学の西田幾多郎教授（写真③）の思い出として、後に國芳は、「先生の講義は一年生の時は哲学概論、ヴィンデルバンドの『哲学概論』の原本を持って来て、2、3分間、黙読しては、その梗概を話すといった調子でした。無論、方々で、原本以外のさまざまな脱線話もつけて下さいました」と書いている。2年目の特殊講義では、自らの思索が著書として出版された本を使って、解釈を加えられながら講義されたという。3年目は演習があり、年によって、カントの『純粹理性批判』がテキストとして使われたり、フィヒテの『知識論』が使われたりしたようである。國芳は、特殊講義にも、演習にも3年間聴講に行ったほどの熱心さであった。3年目の特殊講義では、『自覚に於ける直観と反省』（1917＝大正6年）が出版されており、この本を使っての特殊講義を聴いたようである。

西洋哲学史の朝永三十郎教授（写真④）の思い出として、國芳は後に次のように書いている。「朝永先生のあの背の高い、頬の秀でた、色の浅黒い、しまりのあるお顔は、とてもステキでした。微笑をたたえたシマリのある口元が特にスキでした。哲人という感じにみちみちて、歯切れの良い講義。立派な文章。そして、Sokrates だの、Kant だの、Fichte だのと、きれいな元気のよいローマ字で黒板に書かれると、かつて英語の教師をしてた私でしたから、ほれほれしたものでした」と。

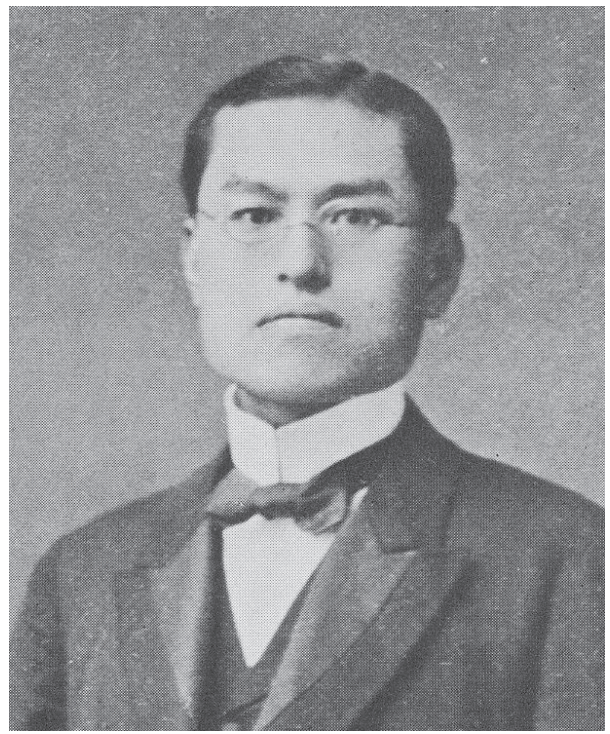


(写真④) 朝永三十郎教授 (1871~1951)

若き日に電信局で働いていた國芳は、速記は得意であった。「鉛筆で一応、先生の講義を筆記して、部屋を借りていたお寺に戻ってから、大学ノートにきれいに清書」したほどであった。ちなみに、日本で2番目にノーベル賞を受賞した朝永振一郎博士は朝永教授の長男である。

倫理学の藤井教授については、「どこか親しみを感じた先生でした。御講義もお元気でした」と記している。学友と一緒に教授宅を訪ねた時の思い出として、テオドール・リップスの『倫理学の根本問題』の原書が教授の本棚にあったことに関連して、「その頃、岩波の哲学叢書の一巻である阿部次郎教授のホンヤクの『倫理学の根本問題』を愛読していて、生(な)さぬ仲の夫婦間の愛の不成立問題で、第八章の結婚論の章で、プロメトイスの松明の光に照らされて、苦しい悩みが解消したような頃でしたし、「字引きと首っ引きしてでも原本のホントの意味を味わってみたいと思った」と、当時の心情を漏らしている。

美学の深田教授についての記述は少ないが、「ハンサムな先生は、全く美学者にふさわしい上品な方でした。お酒がトテモ好きな先生だと、よく聞くものでした」と。國芳は、学友と一緒に下鴨の先生のお宅も訪ねている。下鴨あたりは、京都でも特に緑の多いところであった。教授のお宅の庭が、糺(ただす)の森の鬱蒼たる森と続いているのを國芳が「いいな」と思っ



(写真⑤) 波多野精一教授 (1877-1950)

ると、教授から「自分の庭と外の大自然と合体しるのが名庭園なのだ」と教えられたらしい。國芳にとっては、美学の生きた教えとして、強く記憶に残ったということである。

先ほども触れたように、1917(大正6)年12月、國芳が京都帝大哲学科3年次の途中で、波多野精一教授(写真⑤)が、宗教学講座の担当者として着任され、京都帝大では、初めて専任者によるキリスト教学の授業が行われることになった。

國芳は後に『自伝』において、波多野教授の印象を次のように述べている。「堂々たる体躯で、教壇にお立ちになった姿にはおぼれおぼれしました。あの鋭い眼、ガッシリしたお顔、哲人としての風格、魅せられたものです。先生のお講義の文章は実に、一語の無駄もない彫琢の極みともいべきものでした。整然たる合理的な簡潔な文章でした」と。

哲学と道徳と芸術と宗教、その中でも、とりわけ、宗教と教育の関係について深く探求したいと願った國芳は、「宗教による教育の救済」という題目で、卒業論文を書き進めていた。波多野教授が京都帝大に就任される前は、卒論の指導担当は仏教学の松本教授であった。波多野教授に代わると参考書も自ずとキリスト教関係の本に変わったという。途中からの参考書変更もあり、大変な面はあったものの、波多野教授に論文指導を受け得たことは、國芳にとって幸運なことであった。



(写真⑥) 小西重直教授 (1875~1948)

京大哲学科の中でも、國芳の本拠地は教育学であった。國芳は後に、京都時代に小西重直教授 (写真⑥) が談話の席で、「道徳的人格の、芸術学的人格の、哲学的な人格の、宗教的人格のというが、それを打って一丸とした総合的人格、マア、文化的人格 (Kulturcharakter) とでも云おうか、そんなものが欲しい。誰かそんな意味のものにあてた言葉を使った人はいないかね」と、教育学専攻の学生たちに尋ねられたことを述懐している。哲学科における國芳の研究は、哲学、道徳、芸術、宗教という各論の研究から、徐々に、その教育的人間像である「総合的人格」の問題、そのような人を育てる「総合的教育」は如何に可能であるかという問題へと進んで行ったのであった。

2. 京都洛陽教会における國芳

鹿児島時代に洗礼を受け、広島、高松と教会に通い続けた國芳は、京都においても、日曜日には京都御所の近くの「洛陽教会」へと礼拝に出かけた。そして、子どもたちの日曜学校の説教も行うようになった。では、京都において國芳が通った洛陽教会とは、どのような教会だったのであろうか？また、國芳は何故にこの教会に通うことになったのであろうか？

そもそも洛陽教会は、1889 (明治 22) 年 7 月、旧制第三高等中学校 (後の第三高等学校) が大阪より京都に移転したのを機に創立の動きが始まったという。というのは、この第三高等中学校の教職員、学生の中

に熱心なキリスト教徒がおり、これらの人々が、京都で新たな教会づくりを目指したからであった。同年 10 月、京都の町中に一つの小さなキリスト教の団体が結成され、「東三本木講義所」が誕生した。これがその翌年の 5 月、「洛陽教会」となったのであった。

当時京都では、同志社、平安、四条の三教会が独自の歩みを進めており、洛陽教会 (写真⑦) は京都における「第四番目の教会」なのであった。現在の地である京都御所の近く、同志社の近くに教会が竣工したのは、1893 (明治 26) 年 10 月のことであった。國芳が京都帝大に入学したのは、1915 年。洛陽教会が竣工してから 22 年後のことであった。

では何故に、國芳の選んだ教会が「洛陽教会」だったのであろうか？ここには、広島高等師範学校時代の恩師、栗原基教授 (写真⑧) の存在があった。栗原は広島高等師範学校で國芳たちを教えた後、旧制の第三高等学校 (後の京都大学教養部) の教授となっていた。

國芳は後に『自伝』において書いている。「元来私は、プロテスタン派、日本で呼んだ『日本基督教会』のメンバーでしたから、同派の吉田教会の教会員になるべきでしたらう。先輩櫛引兄を通して二、三回お勧めも受けましたが、ヒロシマ時代の英語の先生だった恩師栗原基先生のお勧めによって、先生の属してい



(写真⑦) 現在の洛陽教会 (撮影：石橋)

した洛陽教会に加入することに決めました」と。その結果、國芳はここで同志社関係者とも多く出会うことになった。

当時日曜学校の生徒の一人に、後に日本ガールスカウト連盟会長になる津下満寿子夫人もいた。同志社の同窓生である津下統一郎と夫婦になり、晩年は玉川学園に住んでいた。英語が上手で、玉川学園中学部でも教えた。私も縁あって教えていただく幸運に恵まれ、親しくさせていただいた。そのおかげで、若き國芳との関わりについても貴重な話を聴くことが出来た。ある時、こんなことを話してくださった。

「私が初めて小原先生にお目にかかった時、小原先生は洛陽教会の日曜学校の先生で、私は生徒でした。私はまだ小学校2、3年だったかと思います。先生は京都帝国大学の学生さんで、その頃は鯨坂先生とおっしゃいました。周知の通り、先生は晩学でいらっしやいましたから、学生さんと言っても少しお年を召していらっしやいまして、中年太りで、落ち着いた小父様のような感じでした。

小原先生が学生服を召したお姿は一度も見たことがありませんでした。いつも緋の着物に緋の袴をつけていらっしやいました。それでも頭には、四角になった帝大の学生帽を時々おかぶりになっていたのをお見受けしました」と。当時の國芳の写真が数枚残っているが、確かに緋の着物に袴、そして学生帽をかぶっている姿が見られる。

では、洛陽教会の日曜学校での國芳については、当時小学生だった津下満寿子夫人には、どのようなことが印象に残ったのだろうか。津下夫人によれば、「日曜学校の畳の大広間に座った私たちに鯨坂先生がお話をして下さいますと、私どもはいつも引きつけられるように、顔を上に向けて先生のお顔を見つめたものです。もう70年前のことですから、どんな内容のお話を伺ったか覚えておりませんが、『イエス様』、『イエス様』とおっしゃったお声は、今も耳に残っております。

今から思えば、その頃から大教育家の素質が現れていたのございましょう。私たち子供たちは先生が大好きで、玉川つ子がお慕いしたように、日曜学校が終わると先生は礼拝堂に行かれねばならなかったのに、皆で先生を取り囲んだり、先生にぶら下がったりしたものです。とっても素敵な、温かみのある先生であったとのこと。國芳の子どもたちに対する態度は、京都帝大の学生であった頃も慈愛に満ちたものだったようで、それは教育者として亡くなるまで変わることはなかった。

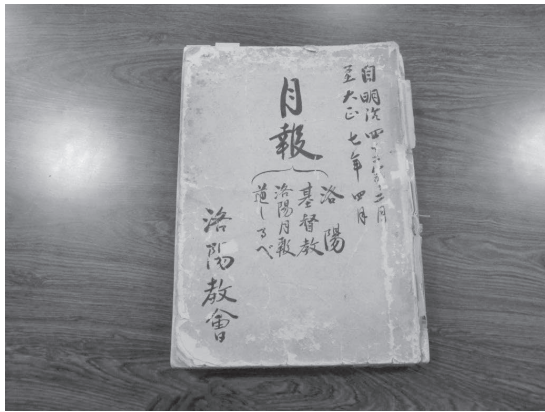


(写真⑧) 栗原教授（前列右から二人目）、
國芳（後列中央）と教会仲間

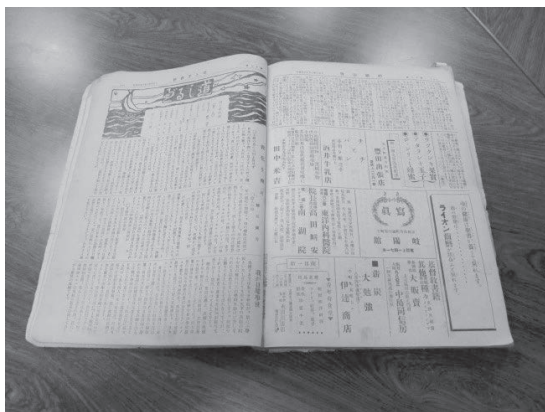
ところで、津下夫人がお姉様から聞かれたところによれば、國芳は、日曜学校の大学生のクラスの責任者でもあったらしい。同志社の創立者新島襄がアメリカのアーマスト大学の卒業生であったことから、当時も同志社にはアーマスト大学の学生たちが留学していたという。そんな時、國芳は、アーマスト大学の学生たちを招いて、英語で聖書の講義をしてもらったりして、積極的に活動していたそうである。そのようなわけで、教会の大学生のクラスには、同志社の学生だけでなく、京都帝大の学生も大勢来ていたという。

現在『洛陽教会110年史』が刊行されているが、その本の中には國芳に関連した記事も載っており、「1915（大正4）年から1918（大正7）年までの間、京都で学生時代を過ごしていた時、國芳は洛陽教会に転入会し、さっそく日曜学校教師や青年会などで活躍した」と記してある。もちろん國芳のことだから、単に生真面目に活動したばかりではなく、時に茶目っ気も発揮した。

日曜日の「少年クラス」あたりでは、「山上の垂訓」と称して、天気の良い日などには、陰鬱な教会の中よりも東山の山々でも歩いた方が健康的でいだろうと、少年たちを連れ出すこともあったらしい。するとその



(写真⑨) 洛陽教会の月報の綴り (撮影：石橋)



(写真⑩) 洛陽教会の月報「道しるべ」

後の教会での礼拝に出席する数が少なくなる。牧師さんから、「今日も山上の垂訓ですか？」とタシナメられることもあったらしい。このような記録を読むと、第三者的には、とても人間臭くていいとも思えるが、本人は当時を振り返り、『自伝』において「悪い教師だったと今、申し訳なく思います」と懺悔している。

國芳は、栗原教授の後を受けて、洛陽教会の「月報」の編集責任者にもなっている。その際、國芳が「月報」の編集と併せて、随筆を執筆して自分の考えを公にする機会を得たことも見逃すわけには行かない。記録によれば、洛陽教会では、1909 (明治 22) 年から 1918 (大正 7) 年にかけて、「月報」(写真⑨)として「洛陽」・「基督教」・「洛陽月報」・「道しるべ」の 4 種類が出ているが、1917 (大正 6) 年 3 月、國芳は「鯉坂國芳」の名前で、教会の月報「道しるべ」(写真⑩)に一篇の随筆を寄稿したのであった。波多野教授と出会う 9 か月前、京都帝国大学を卒業する 1 年 4 か月前のことであった。

そこには「教化を残せ」と題して、次のように書いている。「・・・而して学校ではどうしても知に偏するのは止むをえませぬ。で、何處かで情意の教育をもや

らねばなりません。即、全人の教育が必要です。情意の教育、殊に靈性上の修養となりますと中々困難です。しかしこれなくんば、人はアヤツリ人形と同じく空っぽです。・・・」と。この時の主張は、学校で知育が中心となるのは仕方のないこと、しかし人間の教育を考える時、知育だけでは駄目で、情意の教育が必要である。つまり「全人の教育」が必要である。しかもこの中心にあるのは、「宗教教育」だということであった。「全人の教育」という文言は、國芳の京都帝大の卒業論文の中で再度登場することになる。また、後に見ることにしたい。

3. 國芳の芸術心を育てた京都「南座」

國芳は広島高等師範学生時代に、音楽の素晴らしさ気付いていたが、京都ではさらに、演劇に着目する機会を得た。これも京都時代の大きな収穫の一つであった。國芳は、京都帝大で美学の深田康算博士の教えを受けたことで、教育における芸術の重要性に理論的裏付けを得たが、藤江富佐 (京都市陶磁器試験場初代場長藤江永孝氏の夫人、通称「藤江のお婆さん」と)との出会いによって、演劇に目覚めたのであった。

後の広島高等師範学校附属小学校理事 (教頭) 時代に國芳は児童の演劇を実施、これに「学校劇」と名付けたが、國芳の学校劇活動の背景には、この藤江夫人の存在は欠かせないものであった。國芳は、この藤江夫人にどのようにして出会ったのであろうか。実は、この藤江夫人との出会いには、京都帝大時代の親友、松原寛平氏 (写真⑪) の存在が大きかったようである。

國芳には「松原寛平君と私」という随想があるが、そこで次のように書いている、「私が演劇というものに聊か興味を持ち、『学校劇』という名付け親になれたのも松原君のおかげです。二人が家庭教師としてお世話になった藤江のお婆さんに、南座での中村雁次郎丈の顔見世に一等の座席で、上等のベントウをいただきながら天下の名芸を見られたり、・・・」と。

「京都四条南座」(通称「南座」)(写真⑫)における観劇が、國芳の学校劇実践への大きなきっかけになったようである。このことを裏づけるかのように、私は、津下満寿子夫人から次のような話も聞いた。「藤江のお婆さんを私もよく知っていました。そのお嬢様の文子さんと私とは小学校の同級で、それ以来の親友なのです。・・・はじめ、小原先生のお友達で、後に日本大学の芸術学科を創設された松原寛平さんが、文子さんのお兄様の家庭教師をされておられて、その方に付いて行って、小原先生は藤江さんの家によく遊びに行かれ

たのだそうです。よく南座へ歌舞伎を見に連れて行っておもらいになったそうです。その松原さんが大阪へ移られた後、小原先生が家庭教師を引き受けられたのだそうです。藤江のおばさんも、『鱒坂さんは、将来何事か大きなことをなす人になるだろう』と言われていました。小原先生はそのころから異彩を放っていたようです」と。

そもそも、出雲阿国が1603（慶長8）年の春、京の四条河原で、阿国かぶきを上演したことが歌舞伎の起源とされているそうであるが、「京都四条南座」は、江戸の元和（げんな）年間（1615～1624）から続く日本最古の劇場だと言う。「南座」という名称は、四条通の南側に位置しているところから来ているようであるが、江戸時代の初期、四条河原には幕府公認の芝居小屋が七座あったらしい。芝居小屋が火事で焼失したうえ、興業の中心が大坂（現、大阪）に移ったため次第に数を減らし、江戸時代中期には四条通の南と北、大和大路の西の三座になったと言う。

その後、西と北は閉鎖になり、1892（明治25）年には「南座」だけになっている。時代は進んで、1906



(写真⑫) 現在の「京都四条南座」(撮影：石橋)

(明治39)年に松竹に買収され、1913（大正2）年には、定員1436人の木造大劇場へと大改修が行われたのであった。國芳が藤江夫人に連れて来てもらった「南座」は、この大改修が行われた3～4年後のことだったのである。「南座」で國芳が初めて歌舞伎を観た時の感激、興奮ぶりが、目に浮かぶようである。

4. 真如堂の末寺、理正院での下宿生活

クリスチャンであった國芳だが、キリスト教の世界観の中でのみ生きようとはしなかった。國芳には、「京都に行ったら、ゼヒ、お寺の一室を借りて、静かな思索生活を営みたい」という願いがあった。もともと浄土真宗の家に生まれた國芳であった。仏教のこともさらに知りたかったし、山の寺で静かな寂しい生活もしてみたかったのである。

そこで希望したのが、京都帝大から徒歩で吉田山を越えて行った所にある、真如堂から黒谷あたりのお寺であった。



(写真⑪) 京都帝国大学時代の友人と
(中央が、松原寛平氏、左側が國芳)



(写真⑬) 國芳が下宿していた理正院
(真如堂の末寺)



(写真⑭) 國芳が下宿していた部屋 (撮影：石橋)

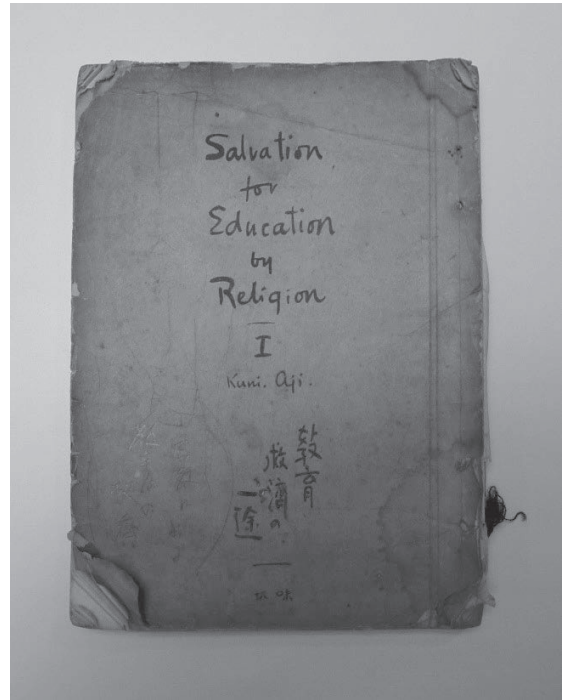
最初から希望通りにここに下宿をすることはできなかったが、辛抱強く待っていると、幸運なことに「真如堂」の末寺の「理正院」(写真⑬)の部屋(写真⑭)が空いた。國芳は書いている。「今度は、理正院というお寺の室が空きました。部屋代は少し高いが、その院には、たった一室だけ。そして、庭もなかなかいいし、東の縁側などは午前のうちには日当たりもいいし、奥の鬱蒼たる杉の森などはトメモありがたい感じでした」と。國芳にとってはこの上ない部屋であった。真如堂には浄土真宗の開祖親鸞聖人が、若き日に居られたということも、國芳にとっては嬉しいことであった。

この点についても、國芳は『自伝』において次のように書いている。「・・・熱烈な恋をなさって、ナゼ僧侶は結婚して悪いのかと命がけで苦しまれた親鸞さんなのです。養家問題で、なさぬ仲で苦しんで居た私です。親鸞さんの命がけの真剣な御苦悶を他人事ならず、わがことのように聊かでも感ずることの出来る私です」と。國芳は真如堂に少なからずご縁を感じていた。

京都での國芳は、キリスト教の教えを主としながらも、親鸞の教えにも耳を傾けながら、自分の人生の問題に向き合う、修行の日々を送ったとも言える。

5. 京都帝大における卒業論文

京都帝国大学哲学科での3年間(当時は3年制であった)の学びの締めくくりとして、1918(大正7)年7月、國芳は、小西重直教授や波多野精一教授の指導を受けることによって、「宗教による教育の救済」と題する卒業論文を提出した。國芳が書き上げた卒業論文は、國芳の言葉に従えば「三百頁の美濃紙大の和綴じ(写真⑮)を五冊、千五百枚」であった。現在の数え方をすれば、「四百字詰原稿用紙、約六百枚」と言ったところであろう。宗教論の執筆のためには、キリスト教



(写真⑮) 國芳の卒業論文の下書き(美濃紙大の和綴じ)
(撮影：石橋)

関係の書籍も多く必要であった。京都帝大の図書館だけでなく、同志社大学の図書館からも多く借りることになり、論文を書き終えた後は、「大八車一台ミッシリ積んで」返しに行ったという。

口頭試問は、宗教学の波多野教授、教育学の小西教授の他に、倫理学の藤井教授が加わり3名が担当であった。藤井教授が「君だけに27日かかったぞ。新聞や雑誌じゃあるまいし」と辛口の批評をされた時、「が、よう書いたなア」と波多野教授が助け舟を出される一幕もあったらしい。卒業論文の評価は、波多野教授が一番厳しくて75点、藤井教授が85点、小西教授が95点であったという。

京都帝大卒業から10か月後の1919(大正8)年6月、國芳は、卒業論文であった「宗教による教育の救済」を『教育の根本問題としての宗教』と改題して、東京の集成社から出版した。1頁490字(35字×14行組)で、500頁からなる大著であった。

『教育の根本問題としての宗教』と改題して出版したこの本の冒頭には、「本書は京都帝大哲学科卒業の際の卒業論文です。教育と宗教。これは私の一生の研究題目、一生の事業であります」と書いている。出来れば、少なくとも数か年間研鑽の上、世に出そうと思ったことも記しているが、2、3の先輩の切なる勧めもあったし、実際教育界に出てみると、一般教育者の宗教に対する理解が殆どかけていると感じ、急ぎ出

版に踏み切ったようである。この書の内容は、ほぼ卒業論文の原本のままであった。

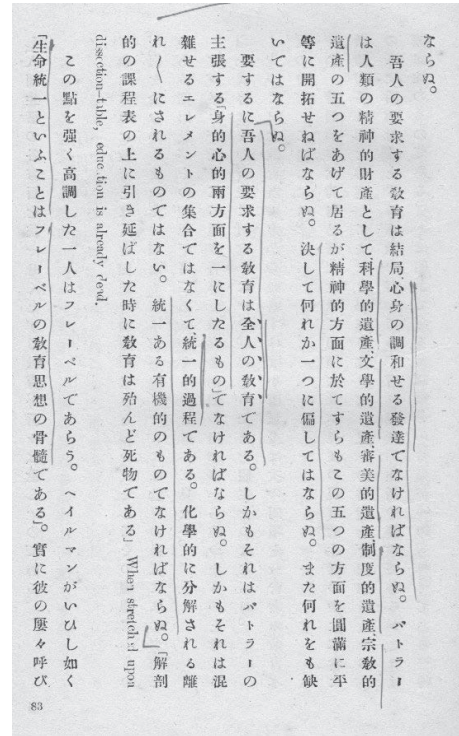
この本は、その後1950(昭和25年)11月20日に大幅に手が入られ、改版され、玉川大学出版部より初版として刊行された。が、実はその際に、第一編から一つの章が、省かれてしまっている。つまり、1919(大正8年)版の集成社版の第一編の本質論は、第一章「宗教論」、第二章「教育本質論」、第三章「教育の内容としての科学、道徳及び芸術と宗教との関係」、第四章「教育と宗教とに対する世人の謬見」の全4章から成り立っていたが、1950(昭和25)年の玉川大学版の第一編の本質論は、第一章「宗教論」、第二章「教育の内容としての科学、道徳及び芸術と宗教との関係」、第三章「教育と宗教とに対する世人の謬見」の全3章から成り立っており、旧版にあった第二章「教育本質論」が、新しい版では削られてしまっているのである。

その間に、國芳には多くの教育関係の書籍が出版されたし、この本は『教育の根本問題としての宗教』という題目であったことから、「宗教」に重点をおくために、あえて第二章の「教育本質論」が省かれたとも思われるが、國芳における教育思想の発展を見ていく視点に立てば、この章は何としても残しておいて欲しかった気がする。

先に、1917(大正6)年3月、國芳は洛陽教会の月報「道しるべ」に随想を寄稿して、「全人の教育」が必要であることを述べたことに触れたが、実は、この第二章「教育本質論」の第三節「教育の成分」において、國芳は改めて「全人の教育」について論及したのであった。つまり、國芳は「吾人の要求する教育は全人の教育である。しかもそれは、バトラーの主張する心身の両方面を一にしたるものでなければならぬ。しかもそれは、混雑せるエレメントの集合ではなくて、統一的過程である」と述べて(写真⑩)、「全人の教育」、「心身の両方面」、「統一」という、後の國芳の「全人教育」の鍵概念をここで表明したのであった。このように見えてくると、京都時代においてすでに、やがて4年後の1921(大正10)8月8日、國芳が提唱するようになる「全人教育論」の基本的な枠組みは、すでに出来ていたとも言えそうである。

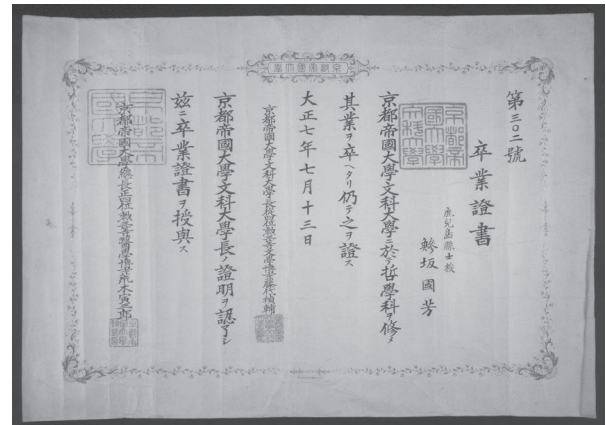
このように見えてくると、京都時代においてすでに、やがて4年後の1921(大正10)8月8日、國芳が提唱するようになる「全人教育論」の基本的な枠組みは、すでに出来ていたとも言えよう。

國芳にとって京都時代は、京都帝大哲学科において、



(写真⑩) 第二章「教育の本質論」、
第三節「教育の成分」83頁

「哲学」、「倫理学」、「美学」、「宗教学」という教育の根本問題を深く学び、宗教を根底に置いた「全人の教育」の思想へと到達出来たばかりではなく、洛陽教会における宗教的実践の中で自らの信仰をさらに深めることが出来たし、南座において日本の伝統、歌舞伎を観劇する機会にも恵まれ、「学校劇」への礎も据えることが出来た。学生時代最後の実り多き修行時代であったと言えよう。國芳は1918(大正7)年7月13日、京都帝国大学哲学科を卒業した。(写真⑪)



(写真⑪) 京都帝国大学文科大学哲学科の卒業證書